

佳作

チャレンジ～「嫌い」を超えた先に～

青森県十和田市立十和田中学校

3年 望月 海伶

「『好きになっちゃう』よりも『嫌いにならないで』という方が大きいな。」

この言葉は、あるときSNSで目にしたものである。受験生と呼ばれる中学3年生と勉強は、切っても切れない関係だ。正直、毎日の受験勉強はつらく、何度「嫌い」と言ったことだろう。

しかし、そんな私にも唯一好きだと思える勉強がある。それは、漢字の勉強だ。

生活の中に溢れている漢字。そんな漢字に興味をもち始めたきっかけは、周囲の友達が高校受験の調査書のために英語検定、数学検定を受け始めたことだった。焦りを感じた私は、漢字検定ならと受検することを決意する。

とはいって、漢字は昔から苦手意識があった。自学ノートはいつも漢字の間違いで、赤ペンの直しばかりだ。そんな私にもできるのか、不安を抱きながらも、勉強を始めると、不思議と漢字に惹きつけられていった。言葉の世界が広がっていく、胸の高鳴り。町やスーパーで知らない漢字を見つけたときの興奮。

そして私は、昨年度準2級に合格した。今は2級合格に向け、受験勉強の合間を縫い、日々勉強に励んでいる。

漢字は、アルファベットとは違い、一字一字意味をもつ。だからこそ、絶妙なニュアンスの違いで、より鮮明に伝えることができる。漢字を学んでいて良かったと思うのは、それぞれの字の意味を考えて、正しく言葉を使おうという意識が生まれたことだ。

例えば「製作」と「制作」。「製作」は、工業製品や道具など、形のあるものを材料を加工し、組み立てる行為をいう。一方、「制作」は、アイデアや表現、デザイン性のコンセプトを重視して、形のないものを形にする活動をいう。同じ「つくる」という意味でも、ここまで内容が違うのだ。

「音楽」と「聴く」が親友で、「映画」と「観る」が家族といったところだろうか。完璧に使わぬのが悪いとかではなく、私がただ正しく使いたいというそれだけだ。

私はあまりしゃべることが得意ではない。あらかじめ考えていなかつたり、原稿がなかつたりするのなら、なおさらだ。言葉足らずで、本当の意図が伝わらず、誤解されてしまい、傷ついたこともたくさんあった。正しい言葉で伝えることは、その相手のリスペクトや気づかいが表れていると思う。これからも、

学び続けることをやめず、間違って伝わってしまうことを減らしていきたい。

そういう意味でも、漢検にチャレンジして、本当に良かったと思う。苦手が苦手なままで終わらず、新しい可能性と出会うことができた。あのときの勇気は、決して無駄ではなかった。だから、こうして今、自分の財産になっている。

もちろん、漢字に限らず、勉強していく、「将来、この知識は使うのか。」というものに出会うことがある。でも、そういう知識を使って大人たちが今日本をつくっている。そして、こうして学んできた私たちが、これから未来を豊かにしていく。

なぜ、何のために学ぶのか、とても難しい問い合わせけれど、私が、漢字の勉強に不思議なやりがいを感じたように、きっと、何かしらの可能性が開けるからなのだと思う。全力で勉強している今だって、全然無駄なんかじゃない。今だったら、SNSで見かけたあの言葉の意味も、少し分かるような気がする。

「苦手。」「どうせ分からぬ。」が、いつのまにか「嫌い」につながっていたという経験は誰しもあると思う。でも、そのときの自分は、チャレンジを恐れていたのではないか、一步踏み出す勇気がなかったのではないかと考えた。漢字の学習を通して、あれほど「嫌い」と思っていた受験勉強も、「嫌い」が薄れていったように思える。得意になれなくていい。嫌にならず、興味と学ぶ意欲をもって学び続けたら、どんな可能性が待っているのか。もしかしたら、そのチャレンジの先には、新たな「好き」が待っているのかもしれない。